山と博物館

第47巻 第12号 2002年12月25日 市立大町山岳博物館

ニホンカモシカの赤ちゃんの名前を募集します

大町山岳博物館

大町山岳博物館の付属園では、今年五月十四日に産まれたニホンカモシカの赤ちゃんを人工ほ乳で育ててきました。現在、この赤ちゃんは生後半年を過ぎ、大人のカモシカと同じ量の餌をもりもりと食べて、元気に育っています。

しかし、この赤ちゃんにはまだ名前がありません。そこで、みなさんに名づけ親になってもらいたいと思い、今回、赤ちゃんカモシカの名前を募集します。

このカモシカに関する次のデータを参考にしていただき、ぜひこの赤ちゃんにぴったりな素敵な名前をつけてもらいたいと思います。

「カモシカの赤ちゃんのデータ」

○生年月日　二〇〇二年五月十四日

○性　別　メス

○家　族　父親…クロ（推定二十二歳）
母親…ミネコ（推定十四歳）

○特　徴　毛色は黒系。
顔は鼻筋の通った細面で、なかなかの美形。マイペースにわが道を行くタイプ。（飼育担当スタッフ談）

○体　重　誕生時…四kg、現在…約三〇kg

なお、応募方法や締切などにつきましては、本誌四ページ末に記載しましたので、そちらをご覧ください。

みなさんからのたくさんのご応募をお待ちしています。

今年５月に付属園で産まれたニホンカモシカの赤ちゃん（メス）

最近のキノコ事情
―里山の見直しから―

清沢由之

手の入った里山

1、「里山」と「山里」

心ある有志や、自然愛護団体、あるいは、長年にわたって、里山を研究のフィールドとしてきた植物や蝶の研究家等から、森林再生、里山再生の声が、かなり以前から上がってきていた。新聞等にも、里山の荒廃した現状を嘆く声がいくつか聞かれた。田舎育ちの私も同じ思いであった。

最近、県や市町村の行政の側からも、同じ声や、それを支援しようという方向が打ち出され、今まで、長い間、キノコをはじめとして木の実や薬草等をいただいてきた私にとっても、これは、大変うれしいことである。

数年前、松本市の公民館に頼まれて、私流の里山講座を全八回でやらせていただいた。その時も感じたが、「里山」という言葉で抱いている概念は、人によってかなり異なるように思われる。「里山」という言葉の名づけ親は京都大学の森林生態学者、四手井綱英先生と言われる。対義語は「奥山」であろうが、最近の山登りの本などで言っている「里山」はその範疇が、今ひとつよくわからない。

ここでは、人の住む村落、集落の後ろにある裏山から始まって、村人が、四季を通じて絶えずお世話になってきた―恵みをいただきそれゆえに、手入れもしてきた人里に近い山、つまり、絶えず人手が加わり、人と深いつながりを保ってきた山と考えたい。

そのかかわりの一端を振り返ってみよう。

① 食糧庫―春の青物（山菜）、木の実、キノコ。スガレ（クロスズメバチ）追い。時にヤマウサギ、タヌキ汁（アナグマ）。

② 衣料庫―カラムシ、ミヤマイラクサ、アカソ、シナノキ等の繊維。草木染めの材料も。

③ 燃料庫―たきぎ、ぼや（灌木や広葉樹の枝をたきぎとした）、焚きつけ用のスギッパ（杉の葉）、マツバ（松の葉）、さらに炭。

④ 建設資材庫―家を建て、屋根を葺き橋をかけた。

⑤ 生活用具庫―食器、道具、家具、農具の柄、下駄の材、輪かんじき、紙も漉いた。

⑥ 行事・祭事の材料庫―門松、小正月の繭玉飾り用のミズキやヤナギ。盆花（ハギ、キキョウ、オミナエシ等）。月見のススキ、紅葉狩り。神事のサカキ（中信地方ではソヨゴで代用）。

⑦ 薬草庫―キハダ、センブリ、等々。

さらに、水源となり、酸素を供給。子供たちにとっては、遊び場であり、動植物をはじめとする自然の学習場所。大人にとっても休養の場であった。村落の借景として、景観保持の役割をもっていた。

このように考えてみる時、里山は、単に村落の背後の山ではなく、人里と一体化したものであったろうと思われる。

里と山の境に社寺があり、社寺林があり、墓もあった。川筋があり、「せんげ」などと呼ばれて村落の生活用水となり、田を潤し、蛍もいた。その田の畦には、子供たちが道草をする草花があった。蝶が食べる食草があった。それは、時に棚田と呼ばれる段々であった。

「せんげ」は今のようにU字型のコンクリート作りではなく、蛍の幼虫の餌となるカワニナや、ザザムシ、魚のカジカもいた。村から畑に通ずる坂道の縁も、コンクリートではなく石垣で、蛇が顔を出し、蜂が巣をかけ、ナメクジが這っていたりした。

私たち日本人の祖先たちは、そこを「ふるさと」―故郷―ゆかりある里としてそこに生まれ、そこに育ち、日本人らしい美意識や感性を育んできたのではなかったか。

このように考えると、私は「里山を守れ」を、里山を含めた『山里』全体のあり方を振り返り、再考し、保持していく方向を探っていってほしいと思う。

第二次大戦後、経済の高度成長期を経て、日本人の生活様式は大きく変貌し、時にその心までも変えてしまったのではないか。

「里山」もその波を例外なく受けた。

開発と言う名のゴルフ場やスキー場、リゾート施設への変身。個人や企業、業者のごみ捨て場。放置による林の過密化―人も入れず、蝶もすめない、キノコも出ない。適度な光を好む植物たちの退化―オミナエシ、キキョウ、センブリ（これらの植物の減少は、山草愛好家たちの乱掘という説もあるが、主原因はここにあると思う）。

2、里山とキノコ
「キノコ山の汚れ」

秋口、お祖母さんと、その孫とおぼしき子供が三人ばかり、花穂を垂れているススキを分けて里山に入っていく。微笑ましい光景である。お祖母さんと年上の子の腰には、竹製の田植えびくが提げられている。木の実もあればいただくだろうが、ねらいはキノコであろう。

たくさん採れればいいねと眼で見送る。私

キノコ狩りの家族

も同じ目的で山へ入れてもらうのだが、こちらは車をとばして、排気ガスをまき散らしながら、あちこち飛び回る。時々は、こんな採り方はいけないのだという思いが頭をよぎるのだが。

さて、先程の一行は良いキノコに巡り会い、山の幸、恵みをいただけたろうか？　少し心配である。いたるところというわけではないが、少しいいキノコが出ると口コミされた山の汚れはひどいものがある。タバコの吸い殻は当たり前。ビールやジュースの空き缶。紙袋。自然の恵みをいただきながら、なんという神経であろう。

「キノコが減っている？」

キノコ採りに行っても、以前のようには採れなくなったという声を最近はよく耳にする。そうだとすると、その原因は何であろう。

① 見やすい図鑑が出たり、各地でキノコ展が開かれ、キノコ通の人が増えた。一理あり。

② 以前から言われるように、キノコ採りにビニール袋が使われ、胞子が撒かれない。かつて、当時、木曽の林業試験場に勤務され、私も一緒に『信州きのこ百科』の本を作った時、浜武人氏は、胞子は朝方四～五時ころ、一斉に噴き出ると話された。全部のキノコがそうではないとしても、この胞子説には若干の疑問も残る。

③ そこで気にかかるのは、排気ガスや酸性雨といった問題である。本来暖地性の蝶が寒い県内で見つかったり増えているという話を聞く時、地球の掃除人として、分解、還元の大切な仕事を担ってくれているキノコを含めた菌類、微生物に影響は出ていないのか。キノコの発生は、その年の天候に大きく左右されるので、研究はなかなか難しいと思われるが、考えていかなければならない課題であろう。採り過ぎなのか、私の探し方が未熟なのか？　マツタケ、ホンシメジ、シャカシメジ、クロカワ、チャナメツムタケ、シロナメツムタケ、コウタケなど私は以前のようにはいただけなくなった。一方ヌメリスギタケモドキなどは、前よりよく見かけるように感じているが、どうであろうか。これは必ずしも研究的、統計的なものではないので断言はできない。菌根菌、腐生菌といった面からも追求したい。

「里山の利用」

コナラ、ミズナラ、クヌギ、クリといったブナ科の植物は、薪炭材として使われた一方、シイタケ栽培の原木として、里山で大切にされてきた。里山の木として今後も手入れをして守っていきたい。また、これらの林の中に菌を打ち込んだほだ木を置いて、できるだけ自然の状態でキノコを育てる方法を大切にしていただきたい。現在栽培されているキノコは四十八種とも五十二種とも言われる。これは今後さらに増え続けるであろうが、里山との関係を軸として、また育成場所として大切にしていっていただければと願う。いずれにしても人口増加の時代、菌食はますます重要なものとなってくるであろう。

3、健康食　薬用としてのキノコ

キノコが健康に良いことは、いろいろな所で知らされている。現在、注目されつつあるのは薬効の面である。

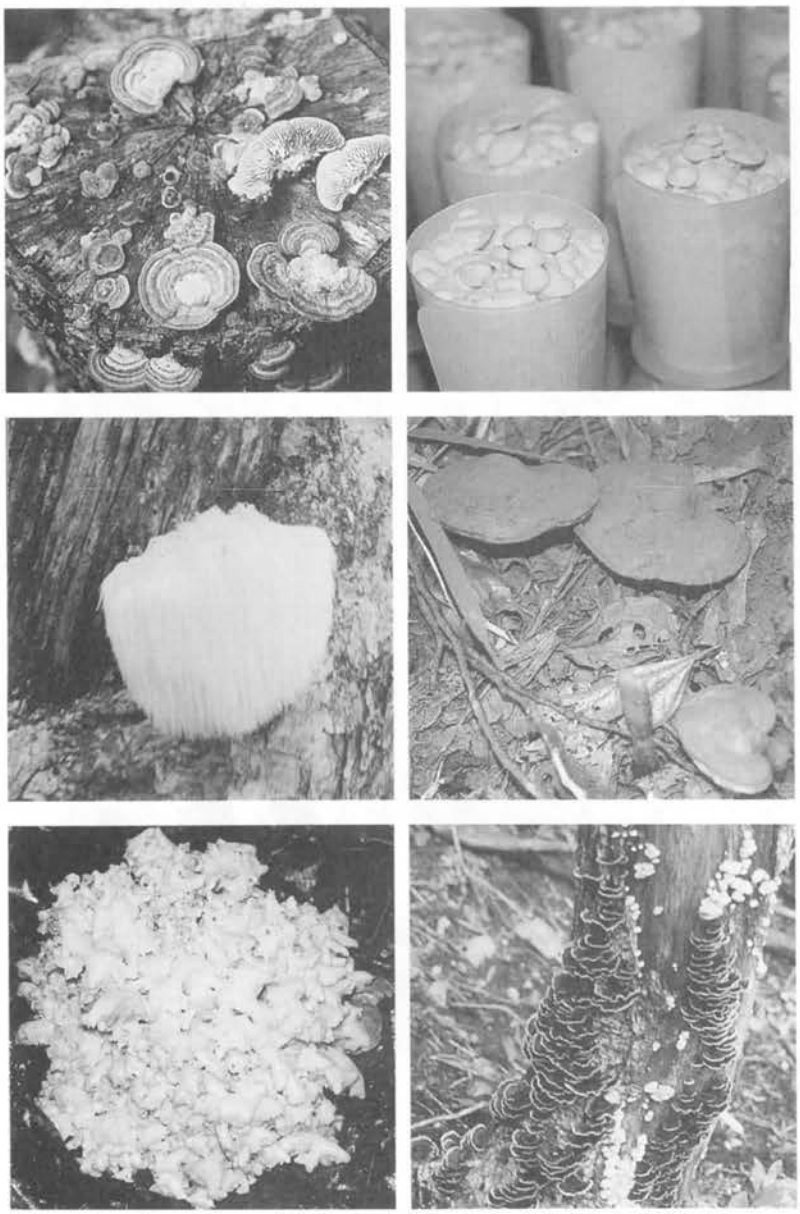
まず、私が聞いたり、接した記憶をたどってみたい。

① 三重大学で、チョレイマイタケに制ガン物質があることがわかった。

② 長野県厚生連北信総合病院の調査で、エノキタケ栽培の農家ではガンの発生率が低いことがわかった。

③ アメリカの大学でツキヨタケから制ガン物質を抽出できた。しかし、一tから一〇gというものだったという話。

④ 私が大町でキノコ展を開いた時、わざわざ岡谷市から薬剤師さんが見え、いろいろ話された。ガンに効くとサルノコシカケが騒がれているが何でも効くわけではない。おもにキノコの裏にある多糖体に効能がある。良いキノコはコフキサルノコシカケ、カワラタケ、カイガラタケの三種類であり、



右　上から、エノキタケ、コフキサルノコシカケ、カワラタケ
左　上から、カイガラタケ、ヤマブシタケ、ハナビラタケ

私がやっていたような焼酎浸けではだめで水で煮出すのがよい。

⑤ 漫画家であり、キノコにも詳しい白土三平氏のマンガにキノコで病が治る話が登場する（氏は、海岸のクロマツにしか出ないとされていたシモコシが長野県内でも発生することを発見した人）。

⑥ 江戸時代にでた、中山道のことを書いた本に、カワラタケ―「胃のくすり」と図入りで載っている。カワラタケから抽出されたクレスチンは厚生省の認可を得て実用化されている。

⑦ カバノアナタケ―ロシアの作家ソルジェニツィンの「ガン病棟」の本にガンの薬チャーガとして登場する。キノコというより岩石の小さな塊のようなもの。

⑧ ここ数年話題になっているもの。ブラジル原産とされるアガリクスタケ、これはマッシュルームの仲間。日本のキノコではハラタケの仲間ということになる。二〇〇〇年十一月の健康雑誌に特集記事が載った。日本きのこ研究会という所からいただいた「アガリクス茸の体験例」というパンフレットがある。

⑨ 続いてこの数年にわかに、話題に上ってきたのがヤマブシタケ、中国名ホウトウクウ。ミズナラに生え私も数回めぐりあったが、比較的少ないキノコ。私の近くのキノコ工場で培養しており、乾燥して中国へ漢方薬として輸出していると聞いていたが、最近スーパーなどで生ものやエキスと乾燥品も売りだされた。

⑩ 私の手元にあるもの。

○紅茶キノコの本　坂本政義

○ヒメマツタケの秘密　甲斐良一

○ガンとさるのこしかけ　松本紘斉

○ガンと古梅霊芝　松本紘斉

○しいたけ健康法　森　喜作

○健康食　きのこ　原　洋一他

⑪ 最近入手した本

○ガン消滅―キノコ二〇種合体高濃度エキスの威力　新井基夫

ここでは、次の二〇種が紹介されている。アガリクス・ブラゼイ、アギタケ、エノキタケ、エリンギ、カワラタケ、オオヒラタケ、カバノアナタケ、シイタケ、シロキクラゲ、タモギタケ、チョレイマイタケ、ハナビラタケ、マイタケ、コフキサルノコシカケ、ブナシメジ、メシマコブ、マツタケ、ヤマブシタケ、マンネンタケ

○ガンに克つ　アガリクス茸の驚異　アガリクス茸総合研究所

○末期ガンでもまだ日本冬虫夏草がある！

○日本冬虫夏草　ガン消滅の衝撃　小林秀光・広瀬　薫

○メシマコブで末期ガンが消えた　菅野光男

○ガンが消えた　55人のリポート　奥村秀夫

これらは、臨床例も報告されているが、まだ研究途上のものも多いようである。ともあれ、アオカビからペニシリンが作られた事実を踏まえると、幾つかの可能性を秘めていることは、確かであろう。二十一世紀は菌類の時代かもしれない。

上　キノコの薬用効果について書かれた一般向きの本
下　子供向けキノコの本

4、今後のキノコとのつき合い

今まで、キノコといえば、食べられるか、毒かといったことのみが中心であった。最近、大町山岳博物館の展示会などは、それを脱して、キノコの地球上での役割なども学び、人と自然のかかわりを見つめようという側面も持たせるようになってありがたいことである。

また、書店へ行くと見やすい図鑑類が出過ぎの面がある反面、子供向きの良いキノコの本も出るようになってうれしいことである。マツタケはプロパンガスに追われたといわれる。私たちは、里山をもう一度見直し、手を入れて守っていくことで、マツタケも呼びもどせるかもしれない。それは、人と里山とのつき合い方、ひいては今後の人の自然とのつき合い方を探り学ぶ道でもあろう。

（松本市北部公民館館長、大町山岳博物館嘱託研究員）

※注　本文は大町山岳博物館編『新・北アルプス博物誌』（信濃毎日新聞社、二〇〇一）の編集時、新たに書き下ろしていただいたものです。（編集部）

カモシカ赤ちゃんの名前　応募方法

はがきに住所・氏名・年齢・電話番号と、赤ちゃんの名前をひとつ書いて、当館まで郵送してください。締切は一月二十日（消印有効）です。（電話・FAXでの応募は不可）

なお、決定した名前は本誌のほか、地元新聞や市役所広報誌等の誌上にて発表します。

【あて先】〒398-0002 長野県大町市大字大町8056-1 市立大町山岳博物館

山と博物館第47巻第12号
二〇〇二年十二月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
FAX〇二六一―二一―二一三三
印刷　大糸タイムス㈱
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三一九三